



パリ・ユネスコ本部での「ヨーロッパ紙芝居会議」の興奮も冷めやらぬ翌四月四日、「紙芝居文化の会」はジョルジュ・ポンピドゥー国立美術文化センターで、フランスの子どもたちに紙芝居を演じてもらうワークショップを開きました。現在、フランスは空前の日本ブーム。当センターで二月から約三か月間開かれた、ティーンエイジャーを対象とするマンガ・アニメの祭典「PLANETE MANGA」の来場者は約二万人を数えます。紙芝居の実演もその一環で企画されたのですが、マンガ大好き！のフランスの子どもたちに果たして紙芝居が受け入れられるのか、不安と期待がありました。

当初は、日本語で演じてフランス語に逐次通訳する予定でしたが、ヨーロッパ紙芝居会議の立役者でもあるマリー・シャルロットさんが直接フランス語で演じるよう計画を急遽変更しました。マリーさんの演じ方は迫力満点！『ごきげんのわるいコックさん』をユーモアたっぷりに演じていると、スタジオの隅に座り込んでマンガを読んでいた子どもたちの視線がすーっと、そちらに惹き寄せられます。

演じ終わったマリーさんが「演じたい人いる？」と希望者を募るや、たちまち三人の女の子がマンガを放り出して駆け寄ってきました。最初にマリーさんが演じ方のポイントをアドバイスすると大きくうなずき、それから満面に笑みを浮かべながら得意そうに紙芝居を演じました。

最終的にこの日のワークショップを訪れたのは子ども六五名、大人五五名。紙芝居を観るだけでなく、自分でも演じたいという志願者は途切れることなく、『おおきくおおきくおおきくなあれ』『あひるのおうさま』『たべられたやまんば』などをフランス語で演じ、紙芝居の持つ力と同時に、自分にもできるんだ、というたしかな手ごたえを感じてもらえたように思います。初めて紙芝居に接した学校の先生は、紙芝居の持つコミュニケーションの力に驚き、これを学校で活用できないものかと話し合っていましたし、恥ずかしがる子ども代わりに自分が前に立って演じたお母さんは、早速紙芝居を手に入れてもっと演じてみたい、どこに行けば手に入るのか、と熱心に訊いてきました。国境をいとも簡単に越え、フランス人の心を魅了した紙芝居のパワーを目の当たりにした瞬間でした。

(フランス語翻訳家)